「授業評価アンケート集計結果」を見て

都市教養学部人文・社会系心理学・教育学コース3年
金子　美祐

2009年度版の授業評価アンケート結果の中で、特に興味を引かれたのが「学外学習にどれだけ費やしているか」についてだ。本来必要とされている学外学習の時間に比べて実際の学習時間は少ないが、これは「授業への参加意識の低さ」と「単位取得の容易さ」のせいと考えられる。

学生が発言・ディスカッションなどをする機会があまりない授業や、課題などが学期末にしか出されない授業では、内容がわかりやすくても講義を聞き続けるだけの受身姿勢になりがちで、能動的に学習しようという意欲が起こりにくい。また出席点などを加味しない、課題などが少ない授業の場合、レジュメを読んで学期末のテストやレポート提出さえすれば、本来必要とされているであろう分の努力をしないでも単位が取得可能な場合がある。

特に都市教養プログラムの学外学習時間が低いのは、他の基礎ゼミナールや実践英語、専門系科目に比べて「大人数クラスが多い」、かつ「単位取得の難易度が低い授業が多い」からであろう。これにより、授業ひとつひとつにあまり重みがないように感じられてしまい、その分野に関する学外学習の時間も更に短くなる、という負の連鎖が生じてしまう。

基礎ゼミナールは演習や興味のある項目について調査・発表を中心とした形式が多いため、しっかりした事前準備が必要となるので他の科目と比べて学習時間は確保されている。

情報リテラシーに関しては、課題や発表のレジュメ・パワーポイント作成など実践の中で復習も行えるため、敢えて「復習」のための時間としていないため数字に反映されていないと考えられる。

そのほかに「授業に満足した」という項目の点数は高いのに「シラバスに掲げられた能力は獲得できた」という項目の点数が低いという、一見矛盾した結果が気になった。これも、先に述べた「単位取得の容易さ」と関連があるように思う。

「授業への満足」は教員の対応や講義の内容などに関わるもので、「能力獲得」は自分自身の能力に関するものである。講義に不満は無いが、自分から能動的に学習せず、あまり苦労しないで学期末テスト・レポートを付け焼刃的な知識で乗り越えることが可能なため、きちんと知識が身にならず、「能力獲得」ができたとは言いがたいからと考えられる。

また、非常に残念に思うのが、ほとんどの学生がこの「授業評価アンケート集計結果」について存在やその詳細を知らないことだ。自分自身、アンケート結果が担当教員に渡されることは知っていたが、結果が冊子の形で報告され、その結果を受けて、大人数クラスを減らしたりＴＡを配置したりと授業改善の参考に使われていることは知らなかった。解りやすくまとめてあるので、ぜひ必修授業で配布するなどして多くの学生に目を通して欲しいと思う。